



TITLE:

[書評] 荒井健注「李賀」葉葱奇編  
訂「李賀詩集」

AUTHOR(S):

興膳, 宏

---

CITATION:

興膳, 宏. [書評] 荒井健注「李賀」葉葱奇編訂「李賀詩集」. 中國文學報  
1960, 12: 172-181

ISSUE DATE:

1960-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/176734>

RIGHT:

の生涯の各時期に區分して考察してみる場合、福永光司氏が「謝靈運の思想」（東方宗教第十三・四合併號）に說かれるごとく、「辨宗論」によつて頓悟を説いた永嘉時代と、情性の自適の中に淨土を憧憬した始寧時代と、三世の輪廻を肯定して來世の淨福に望みを託した晚年時代とで、その間にかなり著しい變化のあとがみられるようである。これがとりまなおさず詩人の思想・精神の發展を物語るものとすれば、やや平面的にすぎたこの論述の中に今少しその點の考察が望ましかつたように考える。

ついできわめて些細なことではあるが、論中にしばしば謝氏一族の名がみえるところから、詩人とそれらの人々との關係を明らかにするために、謝家の系譜を附しておくことが、讀者にたいしてより懇切ではなかつたか。上記拙稿がそうした點で何等かの補いになるならば、望外のしあわせである。

以上諸項目にわたつて蕪辭の數々を弄したが、最初にものべたごとく、その出來ばえは出色である。この書物の著者がいかなる經歷の人か、遺憾ながらこれを詳らかにしな

いが、この業績をものされた勞苦にたいして深い敬意をさげたい。  
（立命館大學 高木正一）

荒井健注 「李賀」

東京 岩波書店 一九五九年二月 二〇四頁

葉葱奇編訂 「李賀詩集」

北京 人民文學出版社 一九五九年一月 三九五頁

岩波版「李賀」の荒井氏の解説には言う。

「李賀は(1)生活體驗にとぼしく社會の現實に對する認識不足の爲に、現實を逃避し美的表現を追求する方向に傾むきすぎ、(2)かれと比較されることの多い屈原のような憂國の熱情に缺けるから、非行動的な唯美主義者だとして、その消極性が批判されている。」（二六ページ）

これは、多少とも現代中國の姿を知る人なら、李賀詩を讀んだ後で當然豫想できる答であらう。つまり私達の目からすれば新中國においては、李賀は第一流の詩人たる條件

を缺いているといつてもよい。

だから、いま葉葱奇氏の「李賀詩集」後記中に次のよう  
な一文のあることを示せば誰しも怪訝な思いを禁じ得まい。  
いわく、「李賀は個性極めて強く、自負の念多く、また己  
が長所を役立て國家のために一個の力を盡そうと切に願つ  
た詩人である。」と。(三七三ページ)

これではさきにあげた荒井氏の解説とはすつかりうらは  
らという外ない。私達は、あるいは中國人の李賀評價につ  
いての先入感を少し變えなくてはならぬかもしれない。だ  
が、その前に、たちもどつてこのような見方の相違を生ず  
るに至つた彼我の立場を、この二書によつていま暫らく考  
えてみることも無意味ではあるまい。

葉葱奇氏の「李賀詩集」の第一の特色は「楚辭」との關  
連がかなり熱つぽく論じられている點である。葉葱奇氏の  
評價によれば、李賀は唐代詩家のうち楚辭の神髓を受けつ  
いだ唯一の人であるという。「李賀は楚辭の精神を受けつ  
いで、彼獨自の奇警で、憤りあふれ、ものさびしく、暗い  
詩歌を創り出した。その形式は唐代一般の古詩歌の形をと

るが、詩の境地、おもむきは全く楚辭を踏襲している。こ  
れは唐代のその他の諸家の中に相當する人物を見つけよう  
のないものである。もちろん私達はこの一點だけを以て李  
白やその他の諸家をおとしめることはできないし、又そう  
するはずはない。更に、李賀詩はあらゆる面で李白を凌駕  
していると云うものでもない。しかし、ただ楚辭のおもむ  
き、心ばせを繼いでいる點について言えば、李賀は成功し  
ているし、傑出している。」(三七〇ページ)

そうして、李賀の豊かなイマジネーションによつて歌い  
あげられた幻想渦まく世界こそ楚辭的世界の再現であると  
する。

李賀の詩が楚辭の流れをくむものであることについての  
指摘は古く杜牧にはじまり、歴代の諸家もしばしば襲うと  
ころであるが、ここでいささか氣がかりなのは楚辭と李賀  
の關係を密切不可分のものとするあまり、李賀のもつ楚辭  
的なもの以外の要素についてはほとんど言及しない傾向の  
見られることである。

同じく豊かなイマジネーションの所産であるとはいいな

がら、李賀には言いようのない沈鬱さ、暗さがある。それは彼の最も特異性ある分野が、「感諷」其三、「蘇小小墓」のごとき冥界を題材とする一連の詩にあることからすでに顯著であろう。諸家はそこから李賀を「鬼才」と稱し、その詩を「鬼仙の詞」と稱する。

ところで、葉氏は李賀を鬼才の名で呼ぶことにはかなり否定的な態度をとっている。「宋代の宋祁が『太白は仙才、長吉は鬼才』と言うや、世の付和雷同の輩は更にこれを據り所に言いぐざとした。實はこの評言は極めて抽象的でありまいであり、ただ「蘇小小墓」、「湘妃」、「秋來」の數篇について言われたものにすぎない。そしてそれら數篇は實際ふかく楚辭の神髓をえていて、まさに杜牧の言う『騷の苗裔』たる傑作である。楚辭九歌中の「湘夫人」、「山鬼」等の篇や、「九辯」、「招魂」等の篇をこれと照合してみればはつきりする。もしこういつた境地やおもむきによつて彼を鬼才と稱するなら、屈原や宋玉は一體『何才』と稱すべきなのか。」(三七二ページ)

ここに見られる通り、葉氏には楚辭と李賀を同質のもの

とし、楚辭の後裔としてのみ李賀を位置づけようとする傾向がいちじるしい。「この詩は楚辭の精神を汲む、——ゆえにこの詩はすぐれる。」いつてみればこんな關係式がほとんど公式的に用いられている。(雁門太守行、「帝子歌」、「湘妃」等の疏解參照)

「楚辭のおもむきがあることによつて彼を『鬼才』と稱するなら」と葉氏は言うが、これを虚心に受けとれば、「鬼才」なる名は李賀の詩に體得されている楚辭的精神への讀嘆にはじまつたということにならう。

ある文學者が彼の先人の深い影響下にあるというとき、それは忠實な過去への順應を意味するのではない。新しく生れる作品はいわば様々な精神的要素の化合物であり、先人の影響は化學變化に參與する一藥品の役割しか果さないからである。だから先後する二つの作品の間に同一均質のエレメントを求めることは不可能であり、また無意味である。李賀の發想が楚辭に多くを負うものであるにしろ、兩者を等式的に結びつけることはこの意味で、行きすぎといわざるを得ない。

葉氏は「蘇小小の墓」では又次のように言っている。「宋の宋祁が賀を『鬼才』と言ひ、宋の嚴羽が賀の詩を『鬼仙の詞』というのは、つまりこの一類の作品について言つてゐるのだが、實はやはり楚辭九歌中の「山鬼」等の篇から得られたものののであり、ただ彼の筆調が特にくらく、きびしいと言ふにすぎぬ。」（二八ページ）

なるほど「山鬼」にはこの世のものならぬ異様な物の化が登場し、暗く妖しい光景を展開する。しかし、詩全體のトーンにはおどかでゆつたりした味わいがあり、李賀詩の「鬼氣せまる神祕な雰圍氣」とはかなり隔たつたものである。

李賀獨自の世界に對して葉氏は眼をつぶろうとしているような懸念を私は覺えてならない。彼の論は「獅子とは消化されたる羊の群である。」というにはなほだ似る。

私には彼が「鬼才」の稱をことさらに否定しようとする意圖は、幽鬼や物の化の登場によつて醸し出される陰鬱で頹廢のにおいのする雰圍氣を喜ばぬためであるように思われる。「感諷」其三を評して葉氏は次のように言つてゐる。

書評

「この詩は失意ののちの懊惱の極まつた頹廢的作品である。挫折、失意のために、秋風が吹き秋の雨が降る時節に逢うと、憂いは人の心を傷つけ、人を衰老へ驅りたてると感じるのである。更に衰老から一步を進めて死に思ひ至る。そのおもむきは暗く、悲愴で消極的にすぎる。これは正に長吉の短所である。」（二五ページ）

ところで、前にも觸れたが、宋人はむしろこういつたおもむきの詩を頭に置いた上で「鬼才」の稱を與えたのである。「幽靈や妖怪など超自然の事物によつて、鬼氣迫る神祕な雰圍氣をかもし出す異常感覺者」と荒井氏が言うのは、正に葉氏の評言にあるような感受性をもつ詩人を指すのではないか。そして葉氏は李賀のもつこの一面を認め難しとするために、「鬼才」なる呼び名をも否定するのではないのか。

結局葉氏の李賀評價は次の評言の中に凝縮されてゐるを見てよいであらう。

「私達が李賀の詩を読むについては、ただ彼の清新奇警な字句や、繁縟絢爛たる語彙や、憂憤あふれる感情を愛ず

べきで、飾りすぎて、理に缺け、まわりくどく、晦澁、かつあまりにも暗くひやかで、ものがなく、頹廢的な面に對してははつきりと選擇がなさるべきである。」(三七二ページ)

彼の強い精神を大きくとりあげ、「鬼才」なる名の象徴すら暗く、頹廢的な面をしりぞけようとする態度は個々の詩の譯解の上にも具體的な形をとつてあらわれている。

一體李賀のように詩全體のまとまりよりは、個々の詩句の彫琢に力をこめる詩人の場合、句と句との間にはかなり大きな溝があり、口語譯によつてそれを埋め、前後の脈絡をつけるとなれば、これは譯者の感覺に頼るところが大きであらう。以下その一例として「贈陳商」の後半の一部を荒井譯と葉譯からとつて對比させてみたい。

(荒井譯)

(陳商は) たそがれに私を訪ねてきたが、苦惱の氣高さは春の季節を憂うつにする。……(中略)

お偉方たちはたとえこの山を

(葉譯)

陳商はたそがれに、この堅く節操を持している私を訪れてきた。春の季節や陽氣も私の家ではすつかり晴れなくなつてしまふ。

……(之略)

愛さずともどうして私の讃辭までも禁じられよう。どうして私が陳商をたたえずに

おれよう。おれよう。私も陳商と同様、

どつかと坐つて白晝の天空を眺めやるのだが、霜にうたれると小さな木となつて身をちぢめ、時候がよくなれば春の柳のように息ふき返すいじけた精神。……(後略)

荒井譯では「長安に男兒がおりまして、二十で心はもはや朽ち果てて、」という前半のメランコリックな獨白の調子が後半にもそのまま引きつがれている。仕官の道を閉ざされて、前途の希望を失つた青年が嘆息まじりにつぶやくことば——「霜にうたれると小さな木となつて身を縮め、時候がよくなれば春の柳のように息ふき返すいじけた精神」などからは自虐のにおいすら感じられる。

一方葉譯によれば、運命の激しさは詩人の心をいたく傷

つけ、惱ませるものではあつても、究極においてその魂まで奪うことはできなかった。いかに激しい苦難の波が押し寄せてこようと、李賀は固く節義を持してやまぬという鐵の意志を失わない人である。

「逢霜作樸櫟、得氣爲春柳」の句はこの二つの譯の生れる一岐路となつているが、問題の「樸櫟」については葉氏※1のものは王琦の注に引く「毛詩正義」の説によるところが多く、荒井氏※2のものは姚文瑩の解釋にやや通ずる。

※1「孔穎達正義、釋木云、樸櫟、心。某氏曰、樸櫟、柶櫟也、有心能濕、江淮間以作柱。」（李長吉歌詩王琦彙解）

※2「究竟逢霜爲樸櫟之凋」（姚文瑩昌谷集註）

だがこれはいままはど問題とするところではない。注目すべきは、同じ詩からかくも別種の二つの人間像が描き出され得る點である。

——苦難にうちひしがれて、じつと身をひそめる人間。

——失意の中にも雄々しく節を持してゆこうとする人間。

私としては荒井譯の身も世もない詩人のなげきの方をとりたいが、しかし又同時に多少の不安を覚える。この譯の感じを喜ぶについてはいくぶん日本人的感覺の働きがある

ような氣がするからである。

このことと思ひ合はれるのは多くの人が李賀の詩の消極性にのみ目をむけがちな現象である。一例をあげよう。

「社會的に葬り去られた彼の、没落の深い悲哀が、肉體的な滅亡を絶えず豫感させられる時……陰慘な絶望の影を帯び……彼の詩に慘む焦燥の色が生じ……焦燥感の果てには、不吉な死が、ちらついて……李賀は、必然的に、時間への恐れを抱いていた。」（上尾龍介「苦吟と象徴——李賀の表現手法について」から中國文學報第七號所收の荒井氏の書評に引用されている形で今一度引用した。）

ところで、これは先にあげた葉氏の「感諷」其三についての批評と全く同じことを言っているのに氣づくであらう。ちがうのは、ただ「これは正に長吉の短所である。」と葉氏がいう部分だけである。

私達日本人にはこの種の發想態度を喜びやすい傾きがあるような氣がする。

李賀には「男兒屈窮するも心は窮せず、枯榮等しからず天公に嗔る」（「野歌」）のような強い精神も存在したのであ

る。

私達はここで次のことを確認しておく必要がある。李賀はいつもため息をつき、泣きごとを言っていたのでは決してなかつた、と。

このこととやや関連を持つことで、「李賀詩集」にはつぎのような論がある。「彼が被壓迫者の婦人や人民すべてに大きな同情を抱いていたことは「宮娃歌」、「追和何謝銅雀妓」、「老夫採玉歌」、「感諷」第一首などを見ると極めてはつきりする。」(三七三ページ)

これは「彼の詩の反映する社會現實」の問題であるが、この方は現代の中國人が旺盛な興味を示す面である。葉氏は個々の詩の疏解中でも、詩がいかなる現實の事實を反映するものであるかについて詳細に論述している。(この點は「李賀詩集」の創見であるが)

「この詩は憲宗が方士を訪ね、長生を求めたことを諷刺している。」——「相勸酒」、(同様の指摘が「苦晝短」、「拂舞歌辭」についてもある。)

「老夫採玉歌」や「感諷」第一首は諷刺の對象がはつき

りしているから問題はないとしても、「相勸酒」や「苦晝短」に於て「憲宗が神仙を好んだ」ことに對する諷刺を詩の主題とみるのは少し無理なように思う。(あるいはこれも日本人的感觸を以てするゆえなのかもしれない。)

荒井氏はこの點に關しては多く指摘しない。例えば「秦王飲酒」一篇に關しては、「秦王が誰を指すかについては諸説があるが、特定の人物にあてはめて考える必要はない」というのに對し、葉氏は「大むねのところは、若い時分英明、勇敢であつた徳宗が、即位の後は宴樂をほしひまにし、忽ちのうちに世を去つたことを嘆くもので、彼のために惜しむ意味がある。」といつてゐる。

李賀の數少ない社會諷刺の詩を以て、ただちに彼が當時の「社會現象を鏡のように忠實に反射した」詩人とは考えられないが、ともかく彼にいくぶんでもその要素があることは認めなくてはなるまい。

非中國的詩人に見える李賀も、決して非中國的要素ばかりを持つていたわけではない。

私達日本人はこの方面をともしれば見逃し勝ちである。



現代中國の李賀評價が、一方ではその消極性にのみ非難が注がれ、他方では「李賀詩集」のように彼のユニークな才に目を開いていないものとすれば、中國人はこの非中國の稀有の才を持つ天才を遇する術を知らず、他の詩人から歸納された方法論をそのまま李賀に應用して彼の詩を解明しようとしているのではないかという不安を覺える。

ひるがえつて私達について言えば、荒井氏が「雁門太守行」について「ここに形象化された息もつまるばかりの緊迫感、目もくらむばかりの光彩と色彩はうちにひそむ作家の精神の異常な強烈さ、——抑壓、凝縮させられて、しかもはがねのように堅固な生命力——を豫想させずにはおかない。」（二七ページ）と指摘するように、彼が單なる絶望的な悲哀の詩人ではなかつたことを忘れてはならない。

李賀には、矛盾し、からみ合つた複雑な要素がある。それは「互いに矛盾する二つの性格」（福田紀一、「李賀の飛翔」——中國詩人選集月報16）という表現では到底あらわしきれぬものではない。精神の激越さ、脆弱さ、行動性、また非行動的思索癖などさまざまな彼の内部的要素の複合した、

アミーバのように流動する生體が、重苦しきのしかかる社會の抑壓のもとに、多種多様の形をとつてあらわれたもの、それが李賀の詩に外ならないと私は解釋する。ともあれ、一つの要素を強調するあまり、他の要素を捨ててかえりみない鑑賞によつては、詩人の全貌はついに捕えられないものとなつてしまふ外ないであらう。

#### 〈追記〉

以上の一文を草した後、葉氏の「李賀詩集」に關して荒井健氏から種々指摘を得たので、ここに補足としてとりあげておきたい。

葉氏は李賀研究の最も基本的な文獻である朱自清編の「李賀年譜」に一言も言及しないが、察するところこれを資料として用いなかつたらしい。以下そのいくつかの根據を述べてみたい。

① 葉氏は太和五年（八三二）杜牧の李長吉歌詩敘に「賀死後凡十五年」とあるところから、その年から逆算して李賀の死を元和十二年（八一七）としているが（三七三ページ参照）、この數え方には一年のずれがあり、實は元和十一年

(八一六)でなくてはならない。

② 後記中で、韓愈の「四舉於禮部乃一得、三選吏部卒無成」からのアナロジイとして、「賀が進士科を受けて及第しなかつたのは、全集中の關係各篇についてみると、一回きりでもなかつたらしい」(三七八ページ)という意見を葉氏は提出している。

唐代の多くの詩人たちがつて、李賀の場合は、單に落第を重ねたというのではなく、二十歳のとき、受験資格そのものを無理無體に剥奪されたのである。だからこそ彼は一生悲しみ續けたのではなかつたか。葉氏は一體、韓愈の「諱辯」や唐書李賀傳をどう受けとつていたのであろう。

この意見、いかなる考證にもとづくものか、或いは單なる思いつきか、「關係各篇」の注解いづれも黙して語らない。

③ このことと關連して、「仁和里雜敘皇甫湜」(一一九ページ)の詩の原注「湜新尉陸渾」に當然感じられるべき疑問(この篇の製作年代は李賀の受験資格剥奪以後であり、陸渾尉任官以來、すでに二年は經ているはずの皇甫湜が「新たに陸渾に

尉たり」とあるのはおかしい。——詳細は荒井氏の「李賀」八六ページ參照)は全く默殺されている。(朱自清氏はこの原注を後人の加えたものとみている。——朱自清文集三、九四二ページ)總じて葉氏の李賀の生涯に關する記述には不十分な點が多い。次にテキストのことについてふりたい。葉氏の底本は明示されていないが、「凡例」(第五條)でテキストクリティックにふれて、「およそ宋本あるいはどれか一つの校本に従い、その他の諸本とは均しく相違するものは、みな「註釋」の中で説明を加えた。」といつてゐる。

現在私達が見ることのできる宋版の影印は、續古逸叢書本(いわゆる蜀本)と董氏誦芬室本(いわゆる宣城本)の二種であり、これ以外に宋版の傳えられていることは、少なくとも一般には知られていない。ところが上記の凡例にいう「宋本」はこの二種のいづれでもないらしい。

たとえば、①「堂堂」(一二四ページ)註「四」「百」は諸本均しく『白』に作る。ここに金本に従う。」とあるが、蜀本はまさに「百」に作つてゐる。(『樂府詩集』も同じ)②「漢唐姬飲酒歌」(三四七ページ)註「十五」「看」は諸本

均しく『郎』に作る、ここに吳正子本に従う。」とあるが宣城本は「看」に作つてゐる。というような場合はまだしも、③「塞下曲」(二九四ページ)註「八」「箕」は各本訛つて『羈』に作る。ここに宋本に従う。」とあるが、蜀本および宣城本ともに「羈」に作つてゐる。(箕)に作るのは四部叢刊本だけである。これはふつう金本といわれているが、王國維によれば實は元刊本であるという。)④「帝子歌」(五二ページ)註「二」「明月』は宋本に従う。今本『帝子』に作るは誤り。」とあるが、一宋本とも「帝子」に作つてゐる。(明月に作るのは四部叢刊本)このような甚だしい誤りはいささか理解に苦しむ。

案ずるに葉氏は清の何焯あたりの校語をそのまま敷き寫してゐるのではないかとさえ邪推される。何となれば、葉氏が「文苑英華」によつて改めたと稱するものの、實は王琦の校語を孫引きしたとしか考えられぬ個所もあるからである。「秦王飲酒」(五三ページ)註「十一」で、『黃娥』は今本多く『黃鵠』に作る、……ここに『文苑英華』に従う。」というが、文苑英華の通行本(隆慶版)は「黃俄」に

作り、靜嘉堂所藏の明鈔本英華では「黃娥」に作り、王琦の言葉通り「黃娥」に作るテキストは手近には見當らない。葉氏の依つた「宋本」がいかなる版なのか、無用の詮索を避けるためにもはつきり記しておいて欲しかったものである。

(京都大學 興膳 宏)